



## 感 動

脳科学者の茂木健一郎さんは、感動のものは「なつかしさ」と「意外性」であると述べています。

先日、この夏に行われる「チャレンジ100」の下見（2回目）に、佐藤前教育長（隊長兼事務局）と野沢班長と3人で、小国町の玉川～大里峠～沼までの8<sup>き</sup>。余りのコースを歩きました。幼い頃に聞いていた「大蛇伝説」の舞台を自分の足で歩くことができたのは有難いことでした。行く道にはブナ林が広がり、足元にはきれいなアジサイの花が咲いていました。峠には立派な鉄塔があり、そこから眺める飯豊の山には、ところどころ残雪があり、雲や空の青がそれを際立たせていました。今から40年以上前、大学3年生の夏、ワンダーフォーゲルの部員を率いて福島山都から入山し、飯豊山～北股岳～机差岳へ大石を縦走した、あの思い出がよみがえりました。

6月16日、「関川マラソン」に初参加。仰せつかった仕事は12キロのスターターと賞状の授与です。北は北海道、西は大阪・奈良・兵庫と、遠方から参加しているのには驚きました。しかも、参加登録者数は1200人超。当日は天候にも恵まれスタート地点の渡辺邸前（ハーフ）、佐藤邸前（12キロ）は、ランナーで埋め尽くされ、壮観でした。元同僚や知人も参加し、大粒の汗をぬぐいながら「沿道の声援が嬉しかった。味噌汁もおいしかった。来年もまた来ます。」と口々に語る笑顔が素敵でした。合間をみてゴール付近に歩みよると、そこに関川小のボランティアの子らが、ゴールテープを握り、走ってきたランナーに飲み物を差し出しているけなげな姿がありました。

世界一の蛇の小さな村は、人々に大きな感動を与える村でもありました。

【写真】関川マラソン（ボランティアの子ども）